

ある高齢障害者の生活史

土室 修

Understanding an aged handicapped person's history

Osamu TSUCHIMURO

要旨：人生の過程は、個々によって違うものであり、すべてに個別性がある。これは、障害者にとっても同じことであり、障害とともに過ごしてきた人生には、一つとして同じものはない。障害者を理解し、共感を得るためには、現在の姿だけでなく、生活や環境、歴史などを含め、多方面からの理解が必要となってくる。

そのための一方法として、本稿では、生活史法を用いることによって、ある一人の高齢障害者がこれまでどのような人生を歩んできたのか、その過程を明らかにしようとした。具体的には、秋田県皆瀬村のMさんを調査対象として、研究を進めることにした。

キーワード：生活史、高齢障害者、障害、地域社会

Summary : Every handicapped person's life is different from each other's and has his and her own personal aspects. In order to understand a handicapped person, we have to know their life, environment history, etc. It is, therefore, important for us to understand their life histories, including their living environment, to share fellow feeling with them and try to have the relevant social infrastructure or welfare systems. In this research, I summed up the life history of a senior handicapped person living in a village of Akita prefecture, to clarify the living process of an object of study using the life history method.

Keyword : Life history, Aged handicapped person, handicapped, local society

I、問題設定

個人が生きてきた道筋は、一人として同じではなく、すべてに差異がある。障害とともに過ごしてきた人生には、喜びや痛みなどを始めとして、言葉では語りきれないほど、多くの体験がある。我々はともすると、障害者の個別的な存在を忘れてしまい、「障害者」という枠をあてはめて見てしまうことがある。障害者は個別的な存在であり、障害は、あくまで一つの属性である。障害者を理解し、共感を得るためには、現在の姿だけではなく、これまでの生活や環境を含め、多方面から見つめることが必要となってくる。そこで本稿では、生活史法を用い、ある一人の高齢障害者がこれまでどのように生きてきたのか、その過程を明らかにしたいと考えた。

だが、生活史法については、研究方法としての課題があり、十分に成熟していないことを理解し

ている。それでも、生活史法を用いたのには、いくつかの理由がある¹⁾。生活史法は、「個人の生活の過去から現在にいたる記録」、「個人の一生の記録」²⁾と理解されている。現在の生活は、過去が蓄積されたものであり、逆に過去の生活は、現在との関連で、その意味を把握することができる。時間的奥行きがあることは、つまり、対象者を過程として理解することができるのである。

さらに、個人は、家族、親族、地域、社会に規定されながら発展するが、社会もまた、個人との相互作用により発展していくものである。この過程において、生活は維持、発展、成熟などを繰り返すのである。このように、生活史の把握によって、障害者を断片的に見ることなく、本人と社会、時代といった過程について、全体的理解が可能となる³⁾。

なお、これまでの生活史研究を見ると、ソーシ

ナルワークにおける診断主義において存在し、診断のための資料として重視されてきた。根本によれば「老人福祉実践の研究上、ライフヒストリー研究を重視しなければならない」⁴⁾とし、ソーシャルワーク実践において、援助効果を高める方法として、その意義を認めている。

また、回想法においては、治療的役割として存在し、生活史調査へは、大きな期待が寄せられている⁵⁾。これらの研究は、大いに評価されるべきものではあるが、生活史そのものを対象としとしているわけではない。

そこで、生活史そのものに着目し、研究を進めることにしたが⁶⁾、本稿は、一般的な学術論文とは異なるものとなっている。しかし、高齢者から直接学ぶということには大きな意味があり、また、歴史的視点からの接近も大切である。生活者の視点から歴史、文化、地域など見つめることにも意義がある⁷⁾。生の過程⁸⁾として、高齢障害者を理解するために、研究を進めるものとする。

II、研究対象と方法

秋田県皆瀬村のMさんを調査対象としているが、それは、次の理由による。生活史は、単に個人の歴史を紐解くだけでなく、時代、家族、文化、地域との関連を理解できるものとして位置づけられるならば、皆瀬村という農山村が、どのようにMさんを育てていったのか、その関係を理解したいと考えたからである。

研究方法としては、Mさんからの口述によって、生活史を把握した。また、調査補完のために、保健婦や村高齢福祉課職員へのインタビューを行っている。

調査期間は平成11年8月であり、Mさんの自宅で面接を行った。これは、Mさんは足が不自由なために、外出困難であることと、リラックスして面接ができるようにと考えたからである。

III、生活史に入るまえに

始めに、Mさんのプロフィールと皆瀬村について、簡単に紹介しておく。Mさんは、昭和5年、皆瀬村に生まれている。先天的な視覚障害をもっていたが、さらに、昭和49年筋ジストロフィと診断されている。現在は69歳であり、妻、息子（長男）夫婦と孫（男子3人）の7人家族である。

Mさんがいる皆瀬村は、秋田県南端部に位置し、宮城県と接している。現在は、過疎化が進み⁹⁾、

高齢化率が増加している¹⁰⁾。村中央を皆瀬川が貫流し、河岸段丘沿いに耕地や集落が点在しており、90%以上を森林が占めている。農林業が盛んであるが、景勝地や温泉などもあり、観光客も訪れている¹¹⁾。

次に、Mさんの生活史については、幼少期から現在までを時代に沿ってまとめている。ここでは、Mさんが話された言葉をそのまま再現しているが、口述をそのまま再現することは、より客観的なデータとなることから、そのようにまとめている。ただし、理解が難しい言葉については、補足を加えている。あわせて、プライバシーの関係上、氏名を伏せていることをお断りしておく。

なお、表記方法は次のとおりである。〈 〉は、筆者の質問、()は補足事項、[]は筆者解釈、「 」は会話、・・・は中略を表している。

IV、Mさんの生活史

1. 幼少期のころ（昭和5～10年）

（祖父母は）もちろんいたし、弟もいたし、妹もいた。兄弟が5人だ。弟1人、妹3人。・・・9人家族かな。・・・家は農家であった。俺の兄弟は、あの頃いい薬もなかったせい、子どもの時分に4人も死んでるもの。・・・何となく、今にして思えば、活気あった気がする。

本人は、何も感じねえけど、親達にしてみれば、（長男に対する）期待はあったんだなあと思う。

2. 障害への気づき（昭和10～16年）

（小学校のころは）やっぱり基本は、読み書きそろばんで、段々にその方が薄れてきて、軍事目的に添ったような、・・・今の体制と全く違う、国定教科書っていうもので、教えられた様な感じはするな。神の国だ。天皇の国だって・・・大国主の尊がでてくる。絵本でも、教科書でも・・・。物語は最終的には神様に通じるストーリーで教えられた気がする。

〈目が悪くなってきたのはいつ頃ですか〉。うん、1年生、2年生の頃までは、何とか見えたような気がするな。（黒板に）字大きく書いてくれたから。あのお、おらの恩師が、・・・うちの近所に家建てて（住んでいた）。幸いなことに、課外授業ってしてもらったことねえけど[ないけど]、黒板は大きい字で書いてもらった。3年、4年、5年と進むにつれて、教科書も多くなる、字も細まくなるっていうことで、ほとんど4年生あたり

の、本なんかゼロだな¹²⁾。

あの頃の先生は、熱心だった。夜に、無報酬で、近所の人達に（勉強を）教えたりしていた・・・。

3. 子どものころの手伝い（昭和10～16年）

今は、機械仕事多くなって、畑にも田圃にも子ども連れてかねんだな。危ぶねえから。そして、そっちさ気とられてるうちに、怪我してもだめだし、（仕事も）はかどらねえからよ。昔はもう、慣らすために、うん、この近所だって、もう（小学校の）1年生さ入ったら、春の雪解け水が入ってる苗代おこしも手伝わせたおん。俺は、（目が悪かったから）そういう事さねがったもな。まず、やれた人はな。山さ行けば、山の仕事（がある）。炭焼きする人は、子どもでも（連れていって）、ミニチュア作ってな、飯事みたいにして、遊ばせたりしてよ。

・・・あと、俺は、弟、妹の子守（した）。昭和14、5年頃までは、学校さ子どもおんぶしていく人、何ほ[何人]もいたぞ。そして、廊下で授業風景みたりな。何ほもいたよ。珍らしくね。おらだって、秋の時、農作業の時、おんぶして行ったりしたこともあるもの。

4. 尋常高等小学校の勉強（昭和16～19年）

<小学校を終わって、高等科に進学したのですか>。（小学校）卒業ったって、その当時の高等科なんて、（今と違う）。・・・グランド狭めもんだから、広げる開墾が主であったもの、夏はな。冬はスキーとか何んか、たまに教える程度でな。その（授業）うち3分の2はそうだったな。もちろん小学校のころから、そういう状態であったな。だから、記憶の中に、勉強らしい勉強は、ほとんどしねがったな。（体育の授業は、目が悪くても）、だいたい追いついて行ったような気がするな。足は遅かったな。その当時は、小いせえ、グランドしか無かったもの。（だから）俺の親父がまったくの無報酬で（土地を）寄付したもの、たばこ畑を。

5. 軍事工場時代（昭和19～20年）

昭和20年の8月に終戦で、その前年に、今なんて言うべ、徴用とかってという言葉で、軍事工場さ、6ヶ月（だけ行っった）。今でいう高等科っていうかな、数えの15のとき、学校終わって、4日目だから、5日目だから。葛飾の、その、軍事工場の一

種だと思ふな、旋盤なんかつくってる。工場の見習いな。（今まで）工場に行っただけでもねえし、経験もねえし、全くの素人行って。半分は、青年学校っていうところで、ほとんどは軍事教練（を行っていた）。教練と普通いってるようだけどな。軍事演習、教練が半分ぐらいだったようだし。同級生の中にも、男女合わせて12～3人行ってるはずだな。ここの小学校だけで。食糧事情が悪かったから、行きたくなかったわけよ。<しょうがなく行っったんですね>。うん。

それで、その当時、小川先生っていう内科があって、総合病院みたいな、その先生に診断書出してもらって、一応、退社でなくな、休養ってことにしてもらって、会社さ届けだ。そして、そのうちに、（東京に）また来たらどうだって、（工場から）手紙もらったも、行くとか行かねって言っているうちに、・・・終戦になったから。あと、ご破算よ。

見習いのうちは、日当85銭（もらっていた）。普通であったような気がする。昭和19年100円の給料取りは、ここ（皆瀬村）では、村長と校長だけだった。

6. 戦中～戦後にかけての食生活、医療

最高、物のない時代、経験した人でないと、想像もつかないと思うのも、・・・昭和18年から22年、戦後2～3年まではな。今頃（夏）から、秋頃になると、よその家のカボチャがなくなったとか、茄子がなくなるとかな、トウモロコシがなくなるとか、しょっちゅうあった時代だ。もちろん、秋の稲なんかもな、・・・持っていく人もいる当時だったもんだがらな。米1俵[60キロ]が12～3円したかな、闇っていうのはよ¹³⁾。農家でも保有米って言って、あの、自分の家で食べる分・・・2合3石、1日な、1人。それを計算して、残りは出さねばねかった。農家のいいところ、ほとんどねえな。

あと俺は、・・・あの当時、子どもいれば金かかることも知らねがったしよ、・・・。うんで、兄弟がまず9人もいてな。欠けてる[死んでる]者いるおん。だってあのころ、ペニシリン、いまペニシリンっていえば笑われるかもしれねけどよ、定期バスも走ってねえ頃で、・・・わざわざ横手の・・・佐藤薬局っていうところまでな。夜中の3時に起きて、稲庭まで自転車で行って。稲庭の一番（バス）まで間に合って、して横手まで、1時間

半か2時間もかかったもんでねがべか(かかったと思う)。今と違って、こっちに定期(バス)走ってなくて、時間表も分からねおん、何時に出るかも知らねからよ。自転車で(稲庭まで)1時間かかった。17、8のころだ。普通では買えないよ、ある人の紹介で買ったのよ。<お医者さんはいなかったんですか>。ここ(皆瀬村)にはいね。稲庭まで行く。他のには(他の病院には)行ったことないけどな。

7. 身体障害者手帳の取得(昭和26年)

俺、昭和26年に眼下で正式に手帳交付になったのはな[もらったのは]。山田眼科・・・今は無くなってしまったからな。大きい方(病院)が交付が早いって言うような話を(山田眼下の先生から)聞いて、あのお、その手帳申請するときはあれだ、(県立)平鹿病院だ。平鹿病院の診断書で申請したんだ。

・・・ああ、これが(身体障害者)手帳だ¹⁴⁾。

8. 交通事情(昭和20~30年代)

学生服とか買うことになれば、稲庭まで行かねばだめだ。だって、そのころ昭和25、6年頃までは、歩くってのは、普通であった。特別なことでも、なんでもおっくでね[面倒でない]。用あればすぐ歩いて。3時間ぐらいかかるんだ、稲庭まで。だって湯沢までだって、何回も歩いた。1日かかるよ、俺の場合はな。湯沢まで行けば日帰りできねよ。泊まりで。(バスが始めて通ったのは)昭和26年。羽後交通のドル箱だったよ、ここは。16本も走ってな。そのうち、2本は急行だよ。車掌2人ついてよ・・・。それでも途中乗り切れなくて、「次にして下さい」って。お客さんいても(バス停に)止まらねの。そういう当時もあったんだ。昭和35、6年まではマイカー持ってる人いねがったんでねえが。

車は乗ったこと[運転]もあるし、・・・人の車だしな、ぶつけたって、痛ましくねんだ。視力がもう、0.01か2あるかだし、ほとんど感でよ。免許挑戦したことはねえな。

9. 結婚から子育てまで(昭和30~40年代始め)

(結婚したのは)数えて28(昭和33年)だったような気がするな。その当時の・・・裁縫学級っていうのがあってな、(妻は)その講師として来ていたんだが、冬だから、(通うのが)難儀で、その

店(Mさんの自宅前にある商店)に泊まってんだ。そこさ、しょっちゅう前々から遊びに行ってたんだな。下手な将棋やるとか、麻雀やるとか。テレビもまだ入ってねかった。今の集会所式だな。知り合い結婚だな。(妻は)泊まってて学校さ通ってた。冬だと(妻の家から学校までは)1時間もかかるからな。車でいったり来たりする時代じゃないからな。結婚当時は、ごく普通に生活できてた。目は悪かったが、それほど支障はなかった。

<子どもさんは何人おられますか>。二人。姉と弟だ。一個(長女)は、昭和35年(生まれ)だったような気がする。息子は、昭和37年だ。・・・昭和62年に(二人とも)結婚した。偶然そういう風になった。寂しさは、ほとんどねがったな。長男は家にいる。

10. 農業の機械化と信仰の喪失(昭和35~40年代)

戦後は結局、昭和30年、ここさ、動力農機が入ったのは。・・・その頃から、隣近所なんかのつき合いとか、連帯感とか。親戚のつき合いとか、連帯感とか、知らず知らずのうちに、徐々におかしくなってきたおな。それは、35年頃から。農山間部に機械が入ってきてから。田仕事、畑仕事お互いに手伝わえないような状態になってからは、今気づくとな。仕事も忙しくなったし。

昔はあの、昔の人達の知恵だと思うけど、七七日(なのかび)は休みだとか、あの、農休日ついたり、それがほとんど神様仏様(のために)行っていた。今日だってホントは6月24日(旧)で、地蔵様の祭りだものな。それがおかしくなっちゃって、・・・。まちまちになっちゃんだな。そして、大きい祭りっていうのも、第3日曜だとか第4日曜だとか(に行っている)。先頃は、(神様とは)全く関係なく観光化してしまってるべ。(今は)神様のための祭りでなく、自分たちの都合で(行っている)。

11. 出稼ぎ時代(昭和40~50年)

(出稼ぎには)行ったよ。10年も。(昭和)40年から・・・35ぐらいから10年ぐらいだ。ほとんど東京だな、東京近郊、東京、埼玉、神奈川。(仕事も種類も)これもいろいろだ。最初に行ったのは、山崎パン。それからは、あの日産自動車。菓子会社。・・・どうせ、雑益だから。もちろん冬だけ。12月から3月まで。俺の場合は、彼岸まで。・・・行ってみれば、(仕事は)色々ある。

例えば、自動車会社でいえば、いろいろ部品あるべ。それを枚数を間違えないように、箱詰めして出荷する。・・・労災も、厚生年金もかけてな。正月来るとき、(家にお金を)持ってきてな。<何か苦労はありましたか>。特別、苦労はないな。俺の場合は。言葉は、最小限通じたな。行ってる連中が秋田県の連中だな。・・・(工場の食堂が休みで)店屋物、週1回だけと飽きたな。ボーリングにも行がねかったし、パチンコさも減多に行がねかった。映画は2、3回見たことある。このころは、仕事もできるくらいは、まだ見えてだ¹⁵⁾。

12. 歩行困難から筋ジストロフィがわかるまで (昭和45～54年)

俺若い時だって、いくらかあったべども、40ぐらい(昭和45年頃)から、坂道がすごく難儀になってきたおな。足が疲れやすくて。歩行が難儀になってきて。(田植えが終わると)それこそ、横手も、湯沢も、十文字も、それから、稲庭はもちろん、神経科とか整形とか、指圧とか、針とか。あれまでいったよ、・・・湯沢の、ずっと愛宕山のほうにある精神病院さ。わい[自分]の親戚の人が当時、(病院で)事務長してたもんだから・・・あの、別家の家の・・・おじさんだけどな、・・・(病院の)事務長さん呼んで、お茶ご馳走するけおな。それで、「何とかお願いだから、入院させてもらえねが」って言うの、絶対だめだって(事務長は)言うの。

10年間は、方々さ(行った)。田植え終わって・・・1回だけ行つたて、すぐ(原因が)わかる分かるわけじゃねがらよ、1年位づつな、こう、田植えから秋まではな。・・・とうとう、(田植えも)出来ねぐなって。・・・目も見えなくなつて・・・。今度、紹介もなく、(ある人から)「秋田さ行ってみたら」って言われて、昭和54年に大学病院行って、6ヶ月入院したおな。近ジスだって、診断されるまで、3ヶ月かかったけおな。・・・あの、腿の肉、東京だが、どこだかさ送って・・・。近ジスだっていわれるまでな。

13. 退院後の生活(昭和50年代中頃)

(農家仕事しなくなったのは)、20年位なるかな。50ぐらいの時かな。入院した年のあたりからな。今、ほとんどお婆ちゃん(奥さんが農業)している。息子もな、ほとんど手伝うこともないけどな、(仕事の)時間遅いもんだがら、ほとんど婆

ちゃん一人で¹⁶⁾。田圃たつて、ほとんど3反4反たつて・・・、甘い農家とおなじなんだおな。

(仕事は)農家だけ。(他は)したことね。田圃が今は3分の1しかねえから・・・俺の時代になってから、道路改修で大分つぶれて・・・。今だば何ぼ、一反歩あるべがや。実測したことね。1反歩位のもんだ。家庭さえ間に合う程度に、やっと間に合う程度に。野菜は買わなくてもいい。

14. 障害の状態(平成元年～現在)

<今病院の方に通ってるんですか>。通つてね、通えね。自力で立てねえようになったもの。立てねくなってから10年くらい経つな。だから、今先生に、診療所の先生に、月1回来てもらってる。往診してもらってる。・・・年々ここ2、3年握力おちてきてよ。ご飯にするつたつて、こういう風にしてよ[ひじをついて食べる仕草をする]、こういう風な姿勢でないと茶碗持てね。風呂さ入るたつて、年に2、3回は手滑っちゃて、逆さまに入ったりしてな。今年の春先だったかな、上がれねえがなつと思ったことも2回ある。風呂はだいたい自分でやるけど[入るけど]、2、3回は滑り落ちる。自力では立てね。足が真っ直ぐにならねもの。(トイレも風呂も自分で行くけど)移動はなんとか、すつていく。

(トイレに)手すりは前はあったけど、手の力無くなくなってから、役ただね。握力に力なくなつてからは。俺だけでなく、誰だって、・・・うんと力になるつもりだけでも、握力がなくなつてからはよ、あれ[手すり]はよ、かえつて邪魔になる。邪魔になるつていうが、それ頼りにして、(手が)外れた場合、怪我大きいと思う。うん。ちゃんと、つかめる力ある人は大丈夫(だけど)。手に握力がもう、2か3あるか、最近計かったことねえから分からねけどね。トイレも段差5、6cmあるわけよ。これ、もし、水洗にするとき、改造するとき、全く段差ないようにしてもらえればいいなつて、改造のとき、職人さんをお願いしてみようかなあ、とは思つてだ。

<目はほとんど見えなくなってますか>。ああ・・・いや。5分や10分は(すごく近づけると)何とか、かんとか見えるけど、長くみてらんない、疲れるつていうか、ざーと動いてな、字体が全然読めねくなる。だから、新聞だつて毎日見えるけど、30分で前ページわかるわけだ。魁(新聞)と毎日(新聞)みてるけどな。見出しだけしか見ね

おん。ほとんど見出しだけ。

15. 現在の体調

<外出はしていますか>。それは、ね[ない]。ほとんどね。ここ10年来。去年、シャイントピア(デイサービス)にお世話になって。デイサービスの体験で。(行くまでに)車酔いして・・・(車椅子で散歩しませんかって言われたが)俺はいいけど、車もし接触したら相手さ気の毒でな。ラクター¹⁷⁾は、相手が危ぶねと思ってな。農道だって車走る世の中だしな。(今は)ぜんぜん外さ出たことね。だからもう、10年も前に歯医者さんさ行ってな。今、歯医者さ行けないの、一番困るな。あとは、家では、風呂とかトイレも、・・・自力では寝返りもできねえのよ。今はできるけどな。布団も何もかけてねがら、動ければ(寝返りは)できるども、冬場は全然だめだ。力なくなってきた。

<体調はどうですか>。体調は、今のところはいいかな。暑さに弱くて、気温30度越えるとよ。まったく乗り物酔いしたような状態。10時頃から午後の5時か6時頃まで。平衡感覚がまったくなくなるものだから、車酔い以上にひどい。食欲はなくなるし、目眩いはするし、全身力なくなる。

・・・酒は、最近飲む。100歳以上の人がでている番組で、「健康の秘訣は何ですか」っていうので、・・・。(飲み始めてから)10年かかって100ミリ飲めるようになって、血圧が安定してきた。100の160ぐらいが、130の70まで(に下がった)。

V、まとめにかえて

Mさんの生活史を見てきたが、これまでの人生において、障害のために、不利益を被ったことや、戸惑ったことなどは語られなかった。まったくなかったとはいえないだろうが、それを聴くことはなかった。もちろん、筆者とMさんのラポール形成に問題がなかったとはいえないが、そこには、Mさんの人柄や、これまでの環境が影響していると考えることができる。

Mさんは、一時期、軍事工場や出稼ぎのために、東京に住んでいたが、これまでの半生は、皆瀬村で過ごしている。幼いころからの人間関係が息づいており、さらに現在では、変わったとはいえ、相互扶助という仕組みのなかで生活をしている。高度経済成長期までは、生活と生産が一体化しており、労働がなければ、生活そのものが危機的状

況になりえる。ある意味では、障害の有無よりも、生活、生産そのものが優先されたといえる。それが、地域社会の受容的態度へとつながり、Mさんを育てていったといえる。

現在では、症状が進行し、歩行困難、握力低下、視力低下など、状態がいいとはいえない。しかしながら、「今の楽しみは、ラジオを聞くぐらいだな。ラジオは二台ある」といい、妻と3人の孫と暮らすことが幸せであるという。

障害をもっている、決して悲観することなく、障害とともに、いまを生きる姿を見ることができた。

謝 辞

調査にご協力頂きましたMさんとご家族の方々、また皆瀬村役場高齢福祉課の佐藤さん、在宅介護支援センターの高橋さんを始め、多くの方々に、大変お世話頂きましたことを、厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 谷富夫編：ライフストーリーを学ぶ人のために、世界思想社、1996。
- 2) 前掲1
- 3) 前掲1
- 4) 佐藤豊道：ソーシャルワークにおけるライフ・ヒストリー把握の史的変遷、ソーシャルワーク研究18, No3, 1992。
- 5) 重田信一編著：現代日本の生活課題と社会福祉、川島書店、1985。
- 6) 社会学においては、トマス/ズナニエッキによる「ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド難民」(1918-20)が始まりとなり、その後、ショウ「ジャックローラー」(1930)、ベッカー「アウトサイダーズ」(1963)など研究があるが、国内では、桜井厚による「被差別部落の生活史」、大出春江による「開業助産婦のライフ・ヒストリー」などがある。
- 7) 一番ヶ瀬康子・河島修・小林博・蘭田碩哉：福祉文化論、有斐閣ブックス、1997。
- 8) 桜井厚：社会学におけるライフヒストリー研究、ソーシャルワーク研究18, No3, 1992
- 9) 国土庁地方振興局過疎対策室監修：過疎対策の現況、平成9年度版
- 10) 皆瀬村の総人口は、平成11年4月1日現在で3211人、高齢化率は26.1% (838人) となっている。

なお、秋田県平均は19.3%である。

- 11) 角川日本地名大辞典 5 秋田県, 角川書店, 1980.
- 12) ゼロというのは、教科書をほとんど読まなくなったということである。
- 13) Mさんは、あとで米価一覧表をもってきたが、それによると、米1俵は25円であった。
- 14) Mさんの身体障害者手帳には、「昭和26年3月9日交付、全色盲、左右とも0.01」と記されている。
- 15) 昭和50年代に入り、急激に視力低下が進み、ほとんど手探り状態となったために、出稼ぎを止めている。
- 16) 息子夫婦とも、農家を継いでおらず、勤めているため、妻が農業をしている。
- 17) 高齢者・障害者用に作られた電動三輪車のことである。